様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 1 日現在

機関番号：14403
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2008～2011
課題番号：20520055
研究課題名（和文）近代化の中の伝統宗教と精神運動—基準点としての近角常観研究

研究課題名（英文）CHIKAZUMI Jokan and His Times

研究代表者
岩田　文昭（IWATA Fumiaki）
大阪教育大学・教育学部・教授
研究者番号：00263351

研究成果の概要（和文）：本研究は、岩田文昭を研究代表者とし、大澤広嗣、碧海寿広、小田晃生、内記洸を研究協力者とする組織のもとで研究を遂行した。そして、真宗大谷派の僧、近角常観（1870—1941）の布教の本拠地であった求道会館に残されていた 1 万通に及ぶ書簡をはじめとする資料を整理・分析し、知識人青年への近角の影響を解明した。発見した重要な書簡としては、宮沢賢治一族、嘉村磯多、伊藤左千夫、三井甲之、古澤平作、武内義範の書簡などをあげることができる。

研究成果の概要（英文）： This project, Chikazumi Jokan (1870-1941) and his times, was organized by Iwata Fumiaki (Representative) with Osawa Koji, Omi Toshihiro, Oda Akio and Naiki Takeshi. We have filed approximately ten thousand letters and documents found in Kyudo-Kaikan, the missionary centre of Chikazumi's. These documents show how Chikazumi influenced the intellectual youths then in various ways. The correspondences especially reveal his relationship with the family of Miyazawa Kenji, Kamura Isota, Ito Sachio, Mitsui Kosi, Kosawa Heisaku and Takeuchi Yosinori.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	700000	210000	910000
2009 年度	900000	270000	1170000
2010 年度	900000	270000	1170000
2011 年度	900000	270000	1170000
年度			
総　計	3400000	1020000	4420000

研究分野：宗教学
科研費の分科・細目：哲学、宗教学
キーワード：近代仏教、真宗、知識人宗教、大正教養主義、宮沢賢治、嘉村磯多

１．研究開始当初の背景

真宗大谷派の僧侶、近角常観（1870—1941）に関する研究は、本科研の研究以前には、皆無といってもよい状態であった。せいぜい、清澤満之の浩々洞との関連で近角の名が触れられる程度であった。近角の洋行中に、東京本郷森川町のその留守宅で浩々洞が発祥したのは確かである。しかし、近角の活動は

それ自体で独自の重要な意義を有している。明治末から昭和初期に旧制高校や帝大、とくに一高・東大や二高などを中心に、青年知識人の思想形成に近角は大きな影響を与えたからである。近角の設立した、本郷の求道会館という説教所と求道学舎という寄宿舎には、多くの若者がその説教を聞きに集まった。青年知識人への影響という観点からいえば、田辺元が回顧するように（『田辺元全集』第8巻、276頁）、近角は、キリスト教の内村鑑三や海老名弾正に比すべき存在であった。

従来、近角の研究が進められなかった原因はいくつか考えられる。まず、真宗大谷派内部の中で、近角に正当な位置が与えられてこなかったことをあげることができる。また、近角を研究するための基礎となる資料が整備されていなかったこともある。だが、なによりその最大の理由は、近角が与えた影響が人文諸科学のさまざまな領域に及んでいることにある。近年、個別の学問は日々進歩し、その分析が精緻になっているが、それだけにかえって、学問横断的な影響力を残した人物の姿は捉えにくくなっている。本科研の研究が近角という人物に注目したのは、たんに知られていない一宗教家を紹介しようと意図したからではない。近角という宗教家を焦点の中心に据えることで、はじめて深く理解できる伝統宗教と精神運動・文化との関係があると考えたからである。

２．研究の目的

本研究は、近角常観という思想家のはじめての本格的研究となるものであるが、本研究のユニークな点は、近角自身の思想の内容を解明するにとどまらず、その思想の受け取られ方、発展のされ方の解明を目指している点である。このような一思想家を視点としてさまざまな精神運動を考察する作業が近角の場合に求められるのであり、その考察によって多様な日本近代の諸思想の変遷の隠された特徴を浮き彫りにすることを目的とするのである。すなわち、日本における精神分析療法、宗教哲学、教養主義、超国家主義、仏教の社会活動といった流れの特色を知識人青年の仏教受容という観点から明確にするのである。

３．研究の方法

近角常観の布教の本拠地であった求道会館に残されていた１万通に及ぶ書簡をはじめとする資料を悉皆調査し、整理・分析した。具体的には、研究協力者である大澤広嗣、碧海寿広、小田晃生、内記洸が最低、月に一日、多い時は、六日、求道会館で作業をした。おおよそ二か月に一度、研究代表者である岩田文昭をまじえて調査状態を確認し、情報を共有化して互いの研究を進展させた。

また、近角が中心になって刊行した三種類の機関紙、すなわち『政教時報』『求道』『信界建現』の電子情報化をし、さらにその内容解明を試みた。

４．研究成果

本科研は、平成２１年１１月と平成２４年３月の二度にわたり、研究成果報告書を作成し、それぞれDVD－ROMを附属させて、関係機関・関係研究者に配布した。この二つの報告書は、下記の[その他]に記載されたＵＲＬからその本文を読むことができるようになっている（報告書附属のDVD－ROMは読むことはできない）。以下に、その概要を説明する。

（１）平成２１年１１月作成の研究成果報告書は、Ａ４判７９頁で、その構成と執筆者は、以下のとおりである。すなわち、「はじめに」（岩田文昭）、「求道会館・求道学舎の起点を共にした仏教青年達」（近角真一）、「近角常観略年譜」（碧海寿広）、「『政教時報』解題」（大澤広嗣）、「『求道』解題」（碧海寿広）、「『信界建現』解題」（ライアン・ワルド）、「求道会館建設寄附者名簿」（小田晃生）」である。これらの論述で近角の生涯と近角が中心となって発行した定期刊行物に関する、おおよその輪郭を描いた。

近角が深く関わった定期刊行物は、『政教時報』、『求道』、『信界建現』の３種類である。ところが、これらの雑誌・新聞は研究者が容易に参照できない状態であった。そこで本科研では、近角研究の基盤となるこれらの刊行物を電子情報化し、それを各々DVD－ROM一枚に収めた。また、多量の情報を有する３種類の刊行物の内容を検索するための便を考え、各刊行物の総目次をエクセルの表に入力し、それを別の一枚のDVD－ROMに収めた。

このように、目次とあわせて計４枚のDVD－ROMを作成し、それを上記内容の研究成果報告書に添付して、関係機関・関係研究者に配布したのである。

（２）ついで、平成２４年３月作成の研究成果報告書の説明をする。この報告書は、Ａ４判182頁である。その内容は、二部計１６章から構成されている。第一部は、論文編で研究代表者もしくは研究協力者が執筆した、近角に関わる９本の論文を収めた。その内容の概要は、以下の通りである。

第１章の岩田文昭「阿闍世コンプレックスと近角常観」は、日本の精神分析学と近角との関係を論じている。近角の思想は、日本精神分析学会初代会長の古澤平作を介して、小此木啓吾や「甘え」理論の土居健郎にまで及んでいることが示されている。

第２章の碧海寿広「哲学から体験へ―近角

常観の宗教思想―」は、帝大哲学科卒の近角が哲学を放棄し、体験を重視するにいたった、その思想形成を論じている。近角の思想の特徴を真正面から学術的に論じたものとしては、この論文が嚆矢となろう。

第3章の岩田文昭「三木清と武内義範―「宗教哲学」研究の先入見―」は、近角に師事した、三木と武内という二人の哲学者の関係について論じたものである。近角という存在を意識することではじめて見えてくる宗教哲学史の一面を示している。

第4章の内記洸「言葉と内面―清澤満之と近角常観―」は、清澤と近角の根底にある思想的特徴を、言葉と主体性をめぐる普遍的な問題連関において解明を試みたものである。

第5章の碧海寿広「近代宗教とキリスト教―近角常観の布教戦略―」は、近角の布教方法をキリスト教からの転用という観点から考察している。

第6章の碧海寿広「青年文化としての仏教日曜学校―大正期の東京における一事例からは―」は、大正期における青年文化の中の仏教という観点から、求道会館で行われた仏教日曜学校の実態を解明したものである。

第7章の大澤広嗣「日本植民地における仏教運動―近角常観と台湾求道会について―」は、近角の影響をうけて結成された台湾求道会の実態を解明し、台湾在住の一般の日本人信徒の在り方を紹介したものである。

求道会館には1万通にも及ぶ書簡が残されていた。その中に、宮沢賢治一族の書簡も20通ほどあった。第8章の岩田文昭・碧海寿広「宮沢賢治と近角常観―宮沢一族書簡の翻刻と解題―」は、その書簡を翻刻し、宮沢一族と近角との具体的な関係を明らかにしたものである。この書簡の中で、賢治の妹トシの書簡が学術的に特別な意義があると認められる。トシは、真宗の信心を獲ることができないと告白しているからである。

第9章の岩田文昭・大澤広嗣「近角常観と嘉村磯多―新出資料の紹介を中心に―」は、求道会館に残されていた、私小説作家嘉村磯多の2通の書簡を翻刻し、近角と嘉村の関係を解明したのである。嘉村が近角に師事していたのは、これまでも知られていたことであるが、この書簡で嘉村の生の声が聞こえることになった。なお、この書簡の発見は、朝日新聞山口版（2010年9月25日朝刊）で紹介されている。

第二部資料編では、求道会館に残された資料を紹介してある。

まず第10章の岩田文昭「求道会館所蔵図書の解題」は、近角が所蔵していた図書の解題である。４４８の図書を五つに分類して作成した図書目録の内容解説をしている。

第11章の大澤広嗣「求道会館所蔵書簡の解題」は、会館に残されていた1万通に及ぶ書簡の解題である。書簡の内容を以下の九つに分類し説明してある。すなわち、１）滋賀県の関係者、２）東京帝国大学の出身者、３）真宗大谷派の関係者、４）仏教青年運動の関係者、５）その他の宗教界関係者、６）監獄と教誨師の関係者、７）求道学舎の出身者と求道会館の支援者、８）宗教関係の諸団体とメディア、９）一般の人々から、である。これらの説明でおおまかではあるが、近角の交友関係の枠組みが示されている。

このうち「７）求道学舎の出身者と求道会館の支援者」について少し詳しく紹介しておく。

常観は、求道学舎に学生を寄宿させ、寝食と信仰生活を共にして、宗教的精神を持つ有為の人材を育てようとした。

求道学舎の出身者のうち、書簡が確認できる主な人物として、西洋史学者の阿刀田令造（1878―1947）、真宗大谷派住職から牧師に転身し富山布教に尽力した亀谷凌雲（1888―1973）、教育者の浅野孝之（1888―1948）、賢治親族の宮沢磯吉（1889―1972）、哲学者の谷川徹三（1895―1989）、ドイツ文学者木村謹治の弟で後に近角の娘婿となった生化学者の木村雄吉（1904―1989）、医薬品ツムラの津村基太郎（2代目津村重舎、1908―1997）などがいる。哲学者の三木清（1897―1945）は一高生の時に求道学舎に通い、近角の説教を聞いた。三木の書簡は確認できないが、一高の友人でその後は東京帝大哲学科に進んだ宮島鋭夫のものがある。

求道会館を設計した建築家の武田五一（1872―1938）、施工した戸田組の戸田利兵衛（1852―1920）の書簡もある。とくに財界人として会館建設を支援した、三菱合資会社銀行部の幹部であった桐島像一（後に地所部長、1864―1937）と三谷一二（後に福山市長、1871―1965）の書簡も確認できる。その他に、物心ともに近角の活動を支援した実業家として、筑豊で炭鉱を経営した麻生商店（現麻生グループ）の麻生太吉（1857―1933）と貝島炭鉱社長の貝島太市（1881―1966）、およびそれぞれの関係者からのものがある。酒造関係の実業家では、四方合名会社（現在の宝ホールディングス、傘下に宝酒造など）社長の四方卯三郎がいる。熊本の球磨焼酎「房の露」創業者の堤重蔵（1878―1967）、ならびに重蔵の妹婿で「峰の露」創業者の堤治助らの書簡がある。

歌人関係者としては、伊藤左千夫（1864―1913）、耳鼻咽喉科医でもある久保猪之吉（1874―1939）、国家主義者で知られる三井甲之（1883―1953）、生化学者でもある加藤七三（1891―1947）などがある。以上が「７）求道学舎の出身者と求道会館の支援者」に関する書簡のおおよその説明である。

続いては第12章から第14章までは、暁烏

敏、武内義範、古澤平作からの書簡の翻刻とその解題である。暁烏敏は、真宗大谷派の僧で清澤満之のはじめた精神主義の中心人物。武内義範は、京都大学文学部宗教学講座の主任教授をつとめた宗教哲学者。古澤平作は、「阿闍世コンプレックス」を提唱した日本精神分析学会初代会長である。これらは残された書簡の中のほんのわずかにしかすぎないが、近角の影響力や交友関係の一端を示したものである。

第 15 章は、碧海寿広と大澤広嗣による「求道会館のその他資料の解題」である。ここでは、１）名簿、２）常音日記、３）「宗教法案反対運動」関連、４）「宗門革新運動」関連、５「求道日曜学校」関連、の５項目にわけて、会館に存在している様々な資料の概略を紹介している。

このうち「２）常音日記」について少し説明しておきたい。近角常観の実弟、近角常音（1883―1953）の日記は、かなり長い期間にわたるものが残っている。常観による日記がほとんど存在しないのと対照的である。布教・教化活動にひたすら専心していた兄と、その兄の活動を支えるための事務的な仕事のみならず、自己の身の回りの細かな作業にも丁寧に時間をかけていた弟といったように、両者のパーソナリティの違いがはっきりと際立つ。

日記は、もっとも古いのが明治 30 年、次いで 32 年のものがあるが、継続的に残っているのは、明治 35 年以降のものである。これはちょうど、常観が西洋視察から帰朝し宗教活動を本格的に開始した時期にあたる。その後、大正 6 年まで約 15 年間にわたるかなり綿密につけられた日記があり、この間に常音の身の回りで起こった出来事について詳しく記されている。また昭和 4 年から 9 年、12 年、21 年から 23 年の日記も、別途入手している。

これらの日記は、明治後期から昭和戦前期にかけて活躍した常観に、ずっと寄り添いながら生きた人物の証言集にほかならず、公に発行されていた機関誌などには記されていない常観の言動等を、そこから抽出することが可能である。あるいは、日記から近角常音という一宗教者の人生や交友関係を読み解き、これを近代日本の宗教史を省みるための方途のひとつにすることもできる。

また、常音は歌人、三井甲之とかなり親しい仲にあり、日記にも三井が頻繁に登場してくることも重要である。以上が、常音日記の簡単な説明である。

最後の第 16 章の碧海寿広「「常観録」解題」は、近角が学生時代の思索や経験や学びの跡を記した、「常観録」と題された、自作ノートに関する説明である。

以上の報告書の内容に加え、DVD-ROM を 1 枚作成した。この中には、次のような資料と画像を収録した。資料としては、求道会館が所蔵する資料の目録を Excel ファイルにて作成したものを収めた。その中身は、「蔵書目録」「書簡目録」「その他資料目録（抄）」「未使用絵葉書目録」「名刺目録」である。

画像関係としては、PDF ファイルで以下の資料を収録した。近角関係では、上記の「常観録」と「求道日曜学校」で使われた求道カード。ついで浩々洞関係では、「浩々洞名簿」、清澤満之、多田鼎、佐々木月樵、暁烏敏の書簡がある。さらに宮沢一族、嘉村礒多、武内義範、古澤平作の書簡である。

以上のような情報がはいった DVD-ROM を一枚添付した研究成果報告書を３５０部作成し、関係機関・関係研究者に配布したのである。

（３）主な発表論文や学会発表は以下の「５．主な発表論文等」に記載の通りだが、それ以外に、事典項目の作成と新聞記事での発表を岩田文昭はなしている。すなわち、『宮沢賢治　イーハトヴ学事典』（天沢退二郎・金子務・鈴木貞美編平成２２年１２月、弘文堂）の「近角常観」の項目担当、ならびに、平成２４年１月２８日『中外日報』第５面の記事「近角常観と青年知識人」である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5　件）
①岩田文昭・大澤広嗣「近角常観と嘉村磯多―新出資料の紹介を中心に」『大阪教育大学紀要　第Ⅰ部門　人文科学』第 60 巻第一号 75-91 頁、2011 年、査読無
②岩田文昭「三木清と武内義範　――「宗教哲学」研究の先入見――」『宗教哲学研究』第 28 号、44-50 頁、2011 年、査読無
③岩田文昭・碧海寿広「宮沢賢治と近角常観―宮沢一族書簡の翻刻と解題」『大阪教育大学紀要　第Ⅰ部門　人文科学』第５９巻第一号　121-140 頁、2010 年、査読無
④岩田文昭「近角と賢治」、『宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報』第 40 号、16-17 頁、2010 年、査読無
⑤岩田文昭「阿闍世コンプレックスと近角常観」、『臨床精神医学』第３８巻第７号、915-919 頁、2010 年、査読無

〔学会発表〕（計　4 件）
①岩田文昭「近角研究 4 年間をふりかえって」、冬の公開講演会「近代と仏教」（「新佛教」研究会と共同開催）、2011 年 12 月 10 日、於求

道会館
②岩田文昭「近角常観と知識人青年――三木清と武内義範――」日本宗教学会第６８回学術大会、2009 年９月１３日、於京都大学
③岩田文昭「近角常観と日本近代精神史」、真宗同朋会運動指定研究：清沢満之を嚆矢とする近代教学の革新運動の研究、2009 年 6 月 30 日、於大谷大学
④岩田文昭「近角常観と知識人青年」、求道会館春の研究会、2009 年 3 月 27 日、於求道会館

〔図書〕（計０件）

〔その他〕
ホームページ等
http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/handle/123456789/26887
http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/handle/123456789/26886

６．研究組織
(1)研究代表者
岩田　文昭（IWATA FUMIAKI）
大阪教育大学・教育学部・教授
研究者番号：00263351

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：